ISSN 2435-709X

HIRAOKA Kindergarten Presents

季刊 湘南自然誌

Vol.42
November 2th 2026

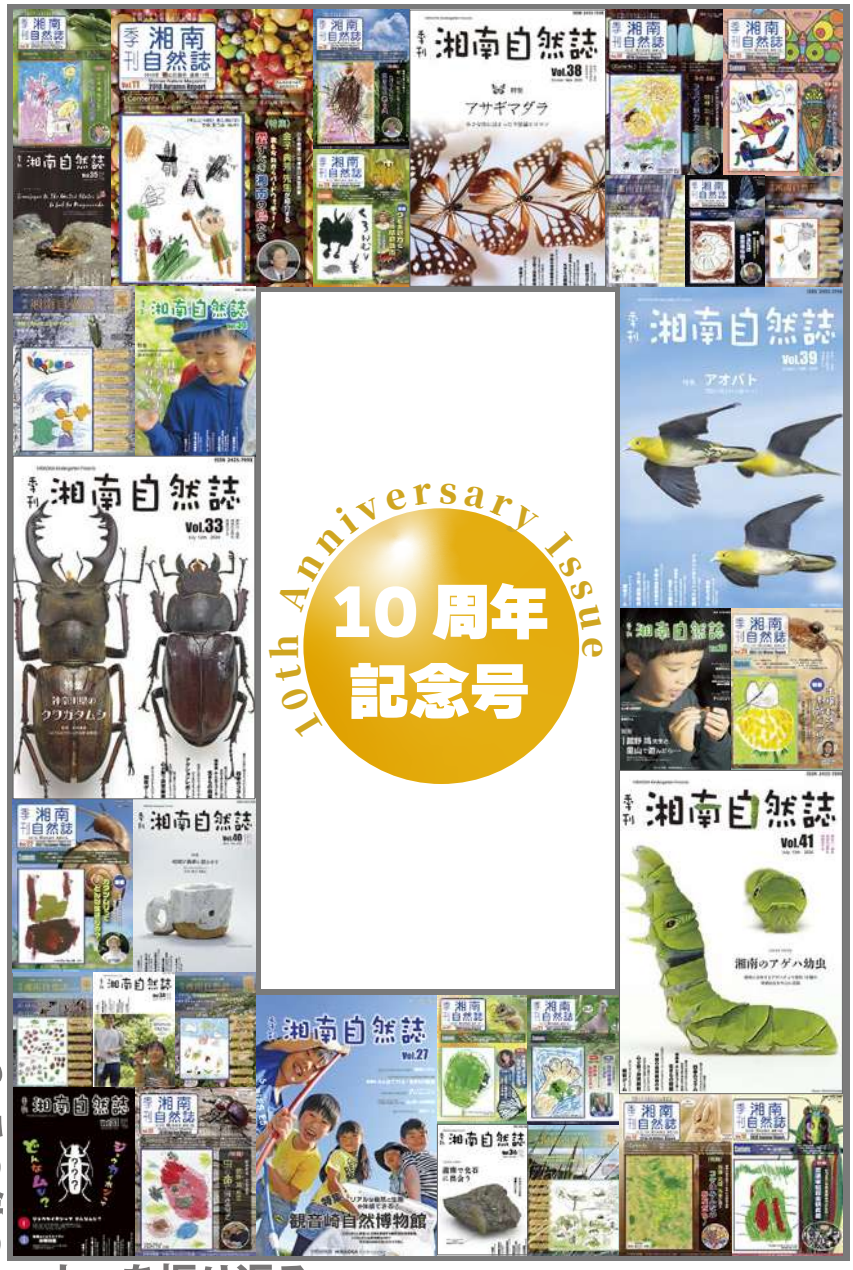
神奈川・湘南地域の自然を再発見する

cover story



1. 特集で振り返る湘南自然誌
2. 湘南自然誌第二期へ

湘南自然誌 10年の歩み 特集を中心に振り返る。



3. その他のコーナーを振り返る
4. 湘南自然誌の明日

四季のコラム 自然に触れ合う中から生まれた編集部発のコラム　**湘南発 みんなでつくる! 生きもの図鑑** 園児や地域の皆さんからの投稿写真を季節毎に掲載　**平岡の自然教育の今** 自然からのメッセージを子どもたちへ　**自然と出会うよろこび** 県立愛川ふれあいの村 吉田文雄学芸員の自然教育コラム　**知育ゲーム** 遊んで学ぶ生きもののこと

Seasonal Columns

四季のコラム（夏）

本誌発行元の平岡幼稚園の園便りに掲載したコラムを一部改編してお届けします。

文／堀田佳之介（平岡幼稚園園長）

空飛ぶ宝石

Topic 1　黄昏時に舞うヤンマたち



夏の夕方（黄昏時）はヤンマ類の活性が上がる時間です。盛んに飛び回って小昆虫を追う姿は「黄昏飛翔（たそがれひしょう）」とも呼ばれ、全国のトンボ好きが夢中になって網を振る、まさにお祭りのような時間です。

ギンヤンマ、マルタンヤンマ、ヤブヤンマなどは数ｍ～十数ｍの高所を飛びまわるので、捕獲には長竿が便利です。しかし、長くなるほど重くなり、距離感やタイミングも掴みづらくなってきます。

一方、夕方に低空を飛びまわるヤンマもいます。湘南地域では、カトリヤンマ、ミルンヤンマがそれにあたります。長竿は必要ありませんが、こちらも捕獲は簡単ではありません。薄暗い中、草木を背景に飛ぶので、姿を視認しづらいからです。そのため、優れた暗所視力や動体視力が求められます。

黄昏飛翔をするヤンマに挑みたいと思ったらどんな所へ行けば良いのでしょうか。湘南地域では丘陵地の谷戸（樹林に囲まれるような田んぼや湿地）が狙い目です。宝石のような輝きを持つヤンマたちの美しい複眼の色は、死んでしまうと失われてしまいます。やっとの思いで捕まえた１匹を手にしたとき、その達成感とともに、きっと様々な感動が溢れてくることと思います。興味のある方はぜひチャレンジしてみてください。

※カーボン製の長竿は雷や電線による感電に注意してください。

1－3／日中枝にぶら下がって休息するヤンマ類（1はカトリヤンマ♂、2はマルタンヤンマ♂、3はヤブヤンマ♂） **4**／ヤンマの美しい複眼（写真はミルンヤンマ） **5**／6mの長竿を使ってヤンマに挑む様子（写真の長竿は釣具の玉の柄を転用したもの）

2026年6月

topic 2 平岡の森の生きものトピックス！







2026年夏に園内で見つかった特筆すべき生きもの2種を紹介します。1種目はクマバチの仲間「タイワンタケクマバチ」。その名の通り、台湾や中国大陸に分布し、枯れ竹に産卵することで知られる国外外来種です。県内では2021年に中井町で発見されて以降増加・拡散の一途を辿り、今年の6月、ついに園内でも捕獲されました。おとなしい蜂と言われますが、メスは毒針を持つので、子どもたちが触らないよう気を付けないといけません。

2種目は「シラホシハナムグリ」。神奈川県では「絶滅」として扱われている昆虫です。2018年、平塚市内の園児自宅で発見されたのが発端となり、2020年に専門家の先生方とともに調査をしたところ、なんと市内の市街地や周辺の河川敷で多くの個体が見られることが判明しました。そしてさらに、当時は見つかっていなかった平岡幼稚園でも、今年多くの個体が見られるようになりました。そもそも、なぜ絶滅したはずの昆虫がこれほどまで沢山いるのでしょう？今見られる個体群は、市街化した環境で突如増えたことから、元々県内にいた個体群ではない「外来個体群」と考えられます。子どもたちが捕まえて楽しむには良い相手なのですが、外来では困ったものです。

1／園内で見つかったタイワンタケクマバチ♀の標本（職員室に展示中です）、オスの顔には黄色い四角の模様がある　**2**／園内の樹液に群がるシラホシハナムグリ
3／シラホシハナムグリを捕獲して楽しむ園児

▶▶ Publisher of this magazine

本誌出版元　平岡幼稚園

平岡幼稚園では、宅地や耕作地に囲まれる園地をビオトープとして管理し、子どもたちは日々たくさんの「いのち」とふれあう園生活を送っています。本誌では、自然体験を重視する本園の幼児教育を紹介しつつ、読者の皆さんの自然環境と生きものへの理解を深める一助になるような記事を掲載しています。





10th Anniversary Issue
10周年記念特集

湘南自然誌 10年の歩み

特集を中心に振り返る。





はじめに

2016年7月5日に平岡幼稚園の有志によって創刊された本誌も今年で10年。本号で42号となった。当初は、園の父母等で結成されたグループ「平岡いきものはっけん隊」の活動報告書というという色彩が強かった。（そのため、16号までは雑誌名に「平岡いきものはっけん隊」の名を冠している。）

しかし、編集経験を重ねて誌面が充実していくにつれ、外部の読者への発信をより重視するようになり、現在は独立した出版企画として編集を進めている。

本誌では、自然への理解を深める一助となることを目指して毎号特集記事を組んできた。テーマは、虫、鳥、魚などの生物をはじめ、化石、地質、海、そして人と自然が関わる文化まで多岐にわたる。中には出版物としては初出となった貴重な話題もあり、地域の自然史の一角ともなるような特集も多い。

今振り返ると稚拙と感じるまとめ方のものもあるが、取材・編集に手を抜いたものは一つもなく、どの号も非常に濃い内容となっている。そこで、十周年企画として過去の特集記事を振り返りつつ、各界識者たちの貴重なお話しが過去のものとして埋もれないよう、索引・目録としても利用できるようにまとめてみた。同時に、現在まで続いている特集以外の各コーナーも簡単に振り返りたい。

バックナンバーについて

本誌バックナンバーの在庫はまだ少数あり、希望者には無料で配布している。またPDF版も園HPで公開している（巻末参照）。気になる号があったら是非ご一読願いたい。

※写真とイラストのクレジットについて　各号で取材をした先生方から提供していただいたものはクレジット表記を省略させていただき、外部より提供、または撮影に協力していただいたもののみ表記しています。

特集で振り返る 湘南自然誌

創刊 10 周年を迎えた湘南自然誌。各界一流の識者たちに協力していただいた特集記事を振り返る。

※ 肩書は当時のものです。

Vol.1 2016.7

『幼児教育における自然体験の意義』

● 岸 一弘（日本生態学会会員）







創刊号の特集は、生態学の専門家で生物全般に詳しい岸 一弘氏に対談をお願いした。テーマは「幼児期の自然体験の重要性」。子ども時代に、昆虫をはじめとする生きものの生と死に接することで、やさしさなど人として大切な感性を育てていこう、と訴えかける内容となった。

◀ 裏表紙も入れて 11 ページだけだった創刊号。生きものの発見記録や、自然にまつわるコラムなどは、形を変え現在まで引き継がれている。



▲ ヤマトシジミ

Vol.2 2016.10

『あいだ先生のチョウ教室』

● 會田 重道（チョウ類研究家）



チョウ類研究家の會田重道氏をお迎えし、チョウの探し方から行動の特徴まで解説していただいた。氏撮影の美しい生態写真をふんだんに使用したこともあり、単回では終わらず、続編を Vol.8 まで 7 回にわたりコラムとして掲載している。



ツマグロヒョウモン ▶

Vol.3 2017.1

『アオバトが繋ぐ人の輪・自然の輪』

● 斎藤 常實（野鳥研究・観察グループ“こまたん”）



▲ 大磯を象徴する鳩 アオバト

湘南大磯を拠点に活動する野鳥研究・観察グループ“こまたん”の斎藤常實氏を招いて、大磯の海岸へ海水を飲みに来る鳩、アオバトの魅力について伺った。長時間のインタビューが凝縮された特集で、これを読めばアオバトについて一通りのことを知ることができる。また、「鳥を追うなかで得られる人との繋がりこそが成果なのだ」と語る氏から、野鳥観察への情熱の源も伺った。



Vol.4 2017.3

『湘南の原風景 ～６５年前の自然と暮らし～』

● 森上 義孝（ナチュラルイラストレーター）



▲ 65 年前の茅ヶ崎の風景

雑誌『BE-PAL』や数々の生物図鑑などで活躍されてきた生物画の大家、森上義孝氏に、65 年前の茅ヶ崎の風景を描いたイラストを披露していただきながら、当時の人々の暮らしと自然環境について語ってもらった。経済成長と共に様変わりした茅ヶ崎の風景。しかし氏の描く風景はどことなく現在の風景と重なり、断絶と連続を同時に感じさせる。未公開のものも含め、全 14 枚の作品が掲載された貴重な特集である。



Vol.5 2017.7

『平岡幼稚園ビオトープのあゆみとこれから』

● 小此木 宣夫 ＆岸 しげみ（ビオトープ管理士）



本誌出版元の平岡幼稚園が 2009 年に最初のビオトープを作る際、多大な助力をいただいたビオトープ管理士の小此木宣夫氏と岸 しげみ氏との鼎談。本園の自然系の活動の原点となったビオトープ創出からのあゆみを振り返りながら、生物の多様性を核に据えたビオトープ運営等について語り合った。



▲ 平岡幼稚園の池作りを指導する小此木氏



◀ 園内各所で展開されるビオトープの全体図も収録

Vol.6 2017.10

『家族で野山に出かけてみよう！』

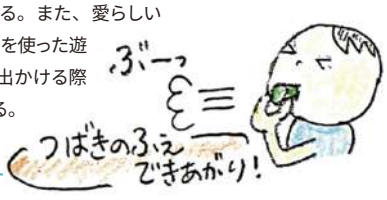
● 手塚 真理（秦野市くずはの家 指導員）



秦野市の自然体験施設「くずはの家」で自然観察の指導に携わる手塚真理氏に、家族で自然体験を楽しむ秘訣を伺った。動植物への豊富な知識と自身の子育て経験を踏まえながら語られた「自然と豊かに関わるコツ」には、強い説得力が感じられる。また、愛らしい直筆のイラストを使って身近な植物を使った遊びを紹介するなど、親子で野山へ出かける際の実用的な内容も盛り込まれている。



▲ 手塚氏直筆のイラスト
▼ 付きで遊びを紹介





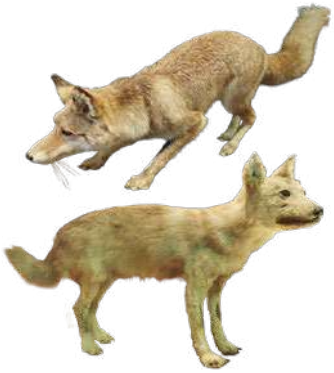
▲ 左／『丹沢の文学往還記』（夢工房）
右／『とどろく谷の怪獣』（夢工房）
文学の研究書はもちろん、創作童話も書かれている。

Vol.7 2017.12
『自然と童話は子どものワンダーランド！』
● 山田 吉郎（文学博士・鶴見大学短期大学部教授）

丹沢山麓の風土から生まれた文学を研究している、鶴見大学の山田吉郎氏との6P にわたる対談。古今東西、民話・童話に動物がしばしば登場することに着目し、文学や文化と自然との繋がりについてお話を伺った。

世界の童話を例にとりながら、街＝現実と、野山＝幻想の世界を往還することの重要性が語られるなど、文学的な切り口から生きものについて考える、湘南自然誌の幅を広げてくれた特集である。





ホンドギツネ（上 / 県立秦野ビジターセンター）とニホンオオカミ（下 / 国立科学博物館）の剥製。民話にしばしば登場する動物についても考察された。



Vol.8 2018.3
『球界一のチョウ収集家』
● 稲川 誠（元大洋ホエールズ投手）

元大洋ホエールズ（現 DeNA ベイスターズ）のシーズン最多勝利記録を持つ名投手稲川 誠氏は、日本産のチョウをほぼ全種収集しているチョウの収集家でもあった。そんな氏の湘南のご自宅に伺い、 コーチやスカウト時代のエピソードもお聞きしながら、現役中から全国を飛び回って採集を続けてきたチョウの標本を披露していただいた。





◀ 国内外の美麗なチョウの標本

Vol.9 2018.6
『心を育む理科教育』
● 一寸木 肇
（日本初等理科教育研究会元理事長）

昭和 16 年発行の理科教員向けの指導書の復刻版『[復刊] 自然の観察』（農文協）の編集にも携わった一寸木 肇氏に、日本の理科教育の歴史とその根底にある思想などを伺った。「知識を詰め込むのではなく、自然をありのままに感じる感性を育てることが理科教育の土台であるべき」「科学は必ずしも自然を愛さなくても良いが、日本の理科は自然を愛する心情を育てることが核になっている」等々、教育者としての観点から存分に語っていただいた。





『[復刊] 自然の観察』（農文協）▶



Vol.10 2018.10
『なぜ？なに？生きもの Q&A』
● 岸 一弘（日本生態学会会員）



◀ キリンはなんで
首が長いの？
その答えは…
（キリン / ズーラシア）

「虫はなぜ光に集まるの？」「毒ヘビはなんで自分の毒で死なないの？」など、子どもや保護者から出た 25 の質問に、生態学の専門家である岸 一弘氏が答える読者参加型の特集。博識な氏でなくては成り立たない企画だ。

取り上げられた生物などの写真を揃えるため、県立博物館からズーラシアやペットショップまで、各所に撮影協力をしていただいて作成した特集である。





◀ バンビラプトルの
生体復元模型（国立科学博物館）
恐竜と鳥類の関係も語られた。

君も今日からバードウォッチャー
Vol.11 2019.1
『愛すべき湘南の鳥たち』
● 金子 典芳（日本野鳥の会 神奈川支部幹事）

寸暇を惜しんで湘南各地で野鳥を追い、研究にいそしむ金子典芳氏の長年の活動から得られた生の情報がふんだんに盛り込まれた特集である。湘南で見られる身近な鳥が取り上げられている他、バードウォッチングへの入り口になるような豆知識から、鳥類と恐竜の関係まで、氏の鳥類への愛と知見があふれる内容となっている。



メジロ ▲



◀ カワセミ



▼ コサギ

湘南の鳥類の
多くを網羅



コゲラ ▲

Vol.12 2019.3
『コケはみんなのお友だち！』
● 吉田 文雄（県立愛川ふれあいの村 学芸員）



▲ ウメノキゴケ



『自然は友だち 春夏編』（神奈川新聞社）など、自然を題材にした著作で知られる吉田文雄氏に、専門であるコケ類の魅力について伺った。コケと私たちの生活との密接な関係なども語られ、さらには、環境の指標となる身の回りのコケ類を読者自ら調べられるよう 24 種をピックアップし、その特徴をまとめた図鑑も掲載した。



コスギゴケ ▶



Vol.13 『虫の命に向き合って』

● 舘野 鴻（絵本作家）

2019.7

生きものを題材にした絵本で大活躍する舘野 鴻氏にお話を伺った特集。創作の裏にある膨大な生物調査・観察の積み重ねの話から、環境保全活動の難しさなど話は多岐にわたったが、中でも衝撃的だったのは虫を食べる話であった。それらはみな氏の中で「命と向き合う」ことへ繋がっているが、同時に「命は状態であって絵には描けない」という絵本作家としての葛藤も語られる。



▲ 絵本制作のためにオオセンチコガネを飼育する舘野氏。





Vol.14 『チョウの魅力と不思議』

● 牧林 功（神奈川昆虫談話会名誉会員）

2019.10

元平塚市在住で、神奈川県を代表する昆虫研究会「神奈川昆虫談話会」の創立メンバーであるチョウ研究の重鎮、牧林功氏に、チョウの魅力を伺った。肉食のチョウの話や、チョウの香嚢（臭いを発する器官）、蛹の糸の数など、マニアックにチョウに迫った特集だ。

また、新幹線の初代運転士という異色の経歴を持つ氏に、運転士時代のエピソードもお聞きした。





▲ 著書『D51 から新幹線まで』鉄道図書刊行会（昭和 41 年発行）より



◀ 幼虫がアブラムシを食べる「肉食のチョウ」ゴイシシジミ（矢田誠規撮影）



Vol.15 『はこね・おだわら昆虫館に行ってみた！』

● 佐藤 勝信（はこね・おだわら昆虫館 館長）

2020.1



「一生虫と遊んでいよう」という、佐藤勝信氏の夢が詰まった私設の昆虫館を取材。標本が陳列された博物館と言うより、生きものをテーマとした芸術館と言った方がふさわしい、唯一無二の昆虫館であった。出入りする子どもたちと一緒に研究活動なども行う氏から、昆虫には多種多様な楽しみ方があるのだと教えられた特集である。



◀▲ 佐藤氏制作『ナスカの地上絵風「十本脚のタマムシ」』（左）と、「野ネズミが食べたクルミでアート」（右上）。館内各所にユーモアあふれる作品が並ぶ。



▲ 川遊びのお供にできる金目川のミニ図鑑

Vol.16 『湘南の清流 金目川の生きもの図鑑』

● 齋藤 和久（元神奈川県環境科学センター研究員）

2020.3



魚類をはじめとした水生生物の研究者である齋藤和久氏に協力を依頼し、地元金目川水系で見られる魚類 40 種、甲殻類 9 種の写真と解説を掲載した。全 10 ページにわたる特集で、外来種の多さが際立つものの、金目川の生態系の多様さが一覧できる内容となっている。

絶滅が危惧される▶ホトケドジョウ



▼ オオキンケイギク





▲ ブルーギル

▲ アカボシゴマダラ



▼ アメリカザリガニ



Vol.17 『外来種ってなに？ なぜ問題なの？』

● 岸 一弘（日本生態学会会員）

2020.7

「可哀想だからそこの公園に逃がしてあげよう」。こうした善意が、時に生態系に悪影響を及ぼしてしまうことがある。外来種問題の本質について生態学の専門家の岸 一弘氏に伺うと共に、今湘南地域で問題となっている外来の動植物を 35 種リストアップして写真と解説付きでまとめた特集である。

▼ 三浦半島の固有種 ミウラメクラチビゴミムシ（菅谷和希撮影）





いつまでも昆虫好きでいたい！

Vol.18 『三浦半島昆虫研究会』

● 中村 進一（代表幹事）

2020.10

およそ半世紀にわたって昆虫と共に歩んできた「三浦半島昆虫研究会」を取材。代表を務める中村進一氏に、三浦半島の昆虫の特色と、会の歴史や機関紙「かまくらちょう」などについて伺った。虫好きという共通項のもと、老若男女が盛んに研究や観察活動を共にしている様子がうかがえる、団体にスポットを当てた特集である。





▲自然の中でたくましく生きる術を実践する山田陽治氏

Vol.19 『やまだ流自然体験術！』

● 山田 陽治（自然体験教育コーディネーター）

2021.1

NHK E テレの『モリゾー・キッコロ森へいこうよ!』にたびたび出演し、人気を博した“森の遊び人”こと山田陽治氏。「自然を楽しむには五感が大切」と説き、子どもたちに、植物で籠を編んだり、釘を鍛えてナイフを作ったり、はたまたその場で捕った生きものを食べたりと、学校では教えてくれないような自然体験教育を展開している。そんな“やまだ流自然体験術”について伺った。





◀ 磯の人気者 アオウミウシ

Vol.20 『いつまでもこの海と暮らしていくために』

● 水井 涼太（環境学博士）

2021.3



▲ タコノマクラ（ウニの仲間）

「人と海の新しい関係を構築する」という理念の元、真鶴町立遠藤貝類博物館を拠点に海について学ぶ機会を広く提供しているNPO 法人ディスカバーブルー。その代表を務める水井涼太氏に、活動理念や真鶴の自然環境について伺った。また、氏に監修していただいて、真鶴の磯場のタイドプールで見られる面白い生きものを 16 種ピックアップしたミニ図鑑も収録されている。







Vol.21 『まずは身近な鳥から野鳥観察のヒント』

● 飯塚 利一（日本野鳥の会 元事務局長）

2021.7

カラスやハトなど、鳥は非常に身近な生きものであるにもかかわらず、私たちは意外とその生態を知らない。日本野鳥の会元事務局長の飯塚利一氏に、身近な野鳥の観察を楽しむための入口になるようなお話を伺った。また、氏の監修のもと、ツバメ、スズメ、カラス、キジバトなど身近な鳥の特徴と生態を写真付きでまとめた記事や、野鳥の呼び込み方（巣箱・エサ台・水場など）なども追録した。



◀ ペットボトルを利用した簡易エサ台

実はヤドカリ ▶
イソカニダマシ





Vol.23 『クモの魅力とその捕食戦術』

● 新井 浩司（クモ研究家）

2022.1

日本蜘蛛学会の新井浩司氏に、クモに関する豆知識や、「水中生活をする世界唯一のクモが日本にもいる」といった驚きの事実まで紹介してもらった。目玉は、クモの主な捕食戦術を16 パターンに分類した、画像付きのまとめだ。「粘液吹き掛け式」「縦穴咬み付き式」「投げ縄とりもち式」「不規則網釣り上げ式」等々、これを読むだけで何かワクワクしてこないだろうか？他では読めないクモの面白さが詰まった特集である。



▲ コガネグモの捕食戦術「円網包み上げ式」





◀ 鳥の糞そっくりトリノフンダマシ

◀ よく見ると愛嬌たっぷりヨダンハエトリ



▲ 毛の生えた殻を持つオオケマイマイ

ヒダリマキマイマイ ▼



Vol.22 『カタツムリってどんな生きもの？』

● 福田 良昭（相模貝類研究談話会会長）

2021.10

貝類の研究家である福田良昭氏に、「カタツムリとは？」「殻と粘液の役割」「驚異の再生能力」等々、項目建てしてやさしく解説していただいた。他にも、湘南地域で見られる主なカタツムリの仲間14 種を写真と解説付きで紹介し、読者も見分けができるようになっている。さらには家庭用品を使った簡単な飼育法まで掲載。ページ数こそ 4 ページと少ないが、ぎっしりカタツムリの情報が詰まった特集である。





ミクロの世界を覗く

Vol.24 『土壌動物の素敵な世界』

● 吉田 譲（土壌動物写真家）

2022.3

地中で暮らす動物の総称“土壌動物”。その中でもミクロサイズの生きものを専門に撮影する写真家、吉田 譲氏を取材。見慣れた地上の生きものとは違った土壌動物の特異な生態に迫る他、採集方法やマクロ撮影の手法まで紹介していただいた。土壌動物の奇妙な姿から生物の造形美を引き出す、氏の美しい写真が満載の特集である。





◀ ミクロの世界を捉える撮影機材

湘南自然誌 第二期へ

Vol.25 より、誌面の大幅な刷新を行った。思い切って園児の絵画を表紙に配置するのをやめ、一般誌のようなデザインを採用。内容的にも、より一般読者を意識したものへ移行する。







▲ 漂着物ならオモチャでも観察

Vol.25 2022.7 『はじめての湘南ビーチコーミング』

● 一寸木 肇（日本初等理科教育研究会 元理事長）

海岸の漂着物を観察する“ビーチコーミング”特集。貝類・甲殻類に詳しい一寸木 肇氏を講師として招いて、茅ヶ崎市の海岸で親子でビーチコーミングを楽しむイベントを企画。そこで拾った 104 種類の漂着物をまとめた特集である。自然のものから人工物まで、ひとつひとつの漂着物から隠れた物語を引き出していくような氏の解説が面白い。（※ Vol.26 に訂正と追補あり）



クモヒトデの仲間 ▲



Vol.26 2022.10 『舘野 鴻先生と里山で遊んだら…』

● 舘野 鴻（絵本作家）

絵本作家の舘野 鴻氏を講師に迎えた自然観察会のレポート。氏による自作の絵本の朗読から始まった観察会は、子どもたちが捕まえてきた虫をその場で調理し、食べてしまうという衝撃の展開に。しかしそれは、ただ観察会を盛り上げるための思い付きではなく、「命」に向き合うための仕掛けであった。「命」をテーマにお伺いした Vol.13 の実践編的な特集である。





◀▲ 捕まえた虫をその場で調理し、食べるという衝撃の展開に



◀ ネアカヨシヤンマ（横須賀市）

Vol.27 2023.1 リアルな自然と生態を体感できる！『観音崎自然博物館』

● 佐野 慎吾（学芸員）



三浦半島の最東部にある観音崎自然博物館の佐野真吾学芸員に館内を案内していただき、三浦半島とその周辺海域の豊かな動植物の展示を紹介する特集である。生体の展示が多く、実際に触れることができるものも。YouTube 活動など私立の博物館ならではの自由な企画・運営についても伺った。



タコブネの生体（相模湾）▶



▲ プラチナコガネの標本（販売品）

Vol.28 2023.3 18 畳の不思議空間『うみねこ博物堂』

● 小野 広樹（店主）



18 畳の店内に、昆虫標本から鉱物、自然科学系の書籍、ヨーロッパの博物画や戦前の骨董品まで所狭しと並んだ「うみねこ博物堂」。知る人ぞ知る、相模原市南区相南にある古物店だ。「世の中につまらないものはない」という店主の小野広樹氏に、その珍奇で不思議な品揃えのコンセプトを伺った。





Vol.29 2023.7 『湘南のセミ』

● 堀田佳之介・富岡誠一（編集部）

外部に取材をせずに編纂した初の独自企画。本誌出版元の平岡幼稚園では、園児家庭とともにセミのぬけがら調査などに取り組んできた。その経験から得られたあまり知られていない着眼点も加え、独自性のある「セミのぬけがらの見分け方図鑑」をまとめた。これを読めば湘南のセミすべてを見分けることができる。

ぬけがら写真は深度合成も行って撮影にもこだわった他、セミにまつわるコラムやセミを深く知るための読書案内を盛り込むなど、編集部渾身のセミ特集である。

◀ 日本唯一のセミ類の研究会「日本セミの会」でも紹介され、大好評であった



Vol.30 2023.10 『自然と出会うために大切なこと』

● 露木 和男（元早稲田大学教授）

早稲田大学の教授として未来の教員の育成にあたってきた理科教育の専門家、露木和男氏を講師として迎えた自然観察会のレポート。子どもたちが自然と触れ合うための仕掛けを数多く用意しつつ、偶然の出会いも大切にする露木流の自然観察手法に迫った。子どもたちの気付きや驚きに寄りそい、野山と心を繋げていくことを促す氏の教育理念が垣間見える特集である。





キンイロジョウカイ▲
（九州産）

ジョウカイボン 伊豆亜種
（三浦半島産）▼



アオジョウカイの一種 ▶
（中国雲南省産）



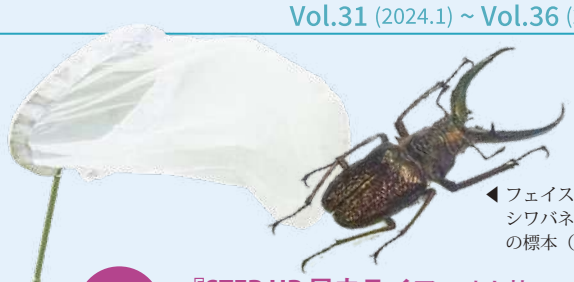
Vol.31 『ジョウカイボンってどんなムシ？』

● 高橋 和弘（ジョウカイボン研究者）

2024.1

「ジョウカイボン」という耳慣れない甲虫について、日本甲虫学会の高橋和弘氏に解説していただいた。ジョウカイボンの仲間は、甲虫目の中でも種数の多さが際立つ多様なグループであるが、一般的な図鑑ではほとんど扱われることがない。本特集では、湘南で記録のある 22 種全種を図鑑形式で紹介。マニアックだが貴重な情報が詰まった特集である。





◀ フェイスタメル
シワバネクワガタ
の標本（販売品）



Vol.32 『STEP UP 昆虫ライフ at むし社』

● 飯島 和彦（むし社代表取締役社長）

2024.3

ヘラクレスオオカブトなど世界の昆虫の生体や採集用品等、昆虫関係の商品を扱う販売店で、昆虫関連の書籍の出版社でもある“むし社”。東京中野区のお店に伺い、社長の飯島和彦氏に案内していただきながら店内をレポートした。また、昆虫採集用品や標本製作道具の紹介や、その選び方の解説も載せた、昆虫ライフの入門書的な特集である。





Vol.34 『自然はみんなのともだちだ！』

● 吉田 文雄（県立愛川ふれあいの村 学芸員）

2024.10

長年教職に従事してきた理科教育のエキスパートである吉田文雄氏を、本誌発行元の平岡幼稚園のビオトープにお迎えし、親子自然観察会を主導していただいた。「自然を知る」ことよりも「自然と友だちになる」ことを主眼とした吉田文雄流自然観察会。子どもたちが自然と繋がって、笑顔があふれていく様をとらえたレポートである。



Vol.33 『神奈川県のクワガタムシ』

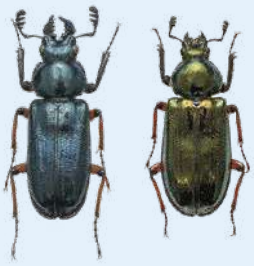
● 木崎 庸雅
（はこね・おだわら昆虫館 副館長）

2024.7

全国を飛び回って甲虫類を調査・収集している木崎庸雅氏に協力していただき、氏が所有する標本をもとに、神奈川県のクワガタ全 18 種のオス・メスを収録した図鑑を作成した。見分けのポイントや顎の個体差なども掲載。8 ページに神奈川県下のすべてのクワガタが網羅された特集である。



▲ オニクワガタ



▲ ホソツヤルリクワガタのオスとメス





Vol.35 『Travelogue to The United States to look for Magicicada.』

（アメリカ旅行記～周期ゼミを求めて）

● 伊地知 英信（サイエンスライター）

2025.1



13 年あるいは 17 年という長い周期で発生する周期ゼミ 5 種のうちの 2 種が、2024 年にアメリカ合衆国のイリノイ州で 221 年ぶりに同時発生した。人知を超えた世界に触れることを喜びとするサイエンスライターの伊地知英信氏が、その様子を見るためだけに渡米したと聞き、体験談を伺った。



◀ *Magicicada neotredecim*
（13 年ゼミ）▶





Vol.36 『湘南で化石に出会う』

● 野崎 篤（平塚市博物館 学芸員）

2025.3



平塚市博物館の学芸員である野崎 篤氏に協力を願い、参加者を募って二宮町の古い地層と化石が露出する大磯海岸を巡り、化石の観察と発掘を体験する様子をレポートした。太古の世界と現在が手の上でリアルに繋がった体験記である。また、平塚市博物館の収蔵品の中から、湘南地域で見つかった化石も紹介している。



約 50 万年前のナウマンゾウの臼歯 ▶
（二宮町出土）（平塚市博物館）

▼ 古墳時代の遺跡の中で化石の観察







Vol.37 『ホンチ相撲』

● 横浜ホンチ保存会

2025.7

ネコハエトリというクモを戦わせる遊び“ホンチ相撲”。1960年代あたりまで、横浜などの子どもたちの間で盛んに遊ばれていたこの遊びを今に継承している団体“横浜ホンチ保存会”を取材した。ホンチ相撲の歴史などを伺った他、毎年横浜で開催されるホンチ相撲大会にも出場してみた。童心に還って一日クモと戯れる「ホンチ相撲」体験記であると同時に、文化的な側面から人と生きものとの関係を考える特集である。

Vol.38 『アサギマダラ 小さな体に詰まった不思議とロマン』

● 芦澤 一郎（チョウ類研究家）

2025.10



神奈川県でアサギマダラの調査を20年以上続けているチョウ類研究家の芦澤一郎氏を取材。世界的にも珍しい「海を渡るチョウ」アサギマダラの謎について伺った。

また、氏の調査ポイントの一つとなっている東京湾の無人島猿島（横須賀市）に渡り、アサギマダラのマーキング調査に同行。その様子をレポートしながら調査手法の紹介もしている。



◀▲ 猿島に渡りマーキング調査にも同行

Vol.39 『アオバト 荒波に揉まれる森のハト』

● 野鳥観察・研究グループ こまたん

2026.1



丹沢山地の森から、約30km離れた大磯町の照ヶ崎海岸まで、はるばる海水を飲みに飛来するアオバト。大磯のみならず湘南の象徴といってもいいこの美麗な鳩を追い続ける野鳥観察・研究グループ“こまたん”の斎藤常實氏と金子典芳氏に協力していただき、Vol.3以来再びアオバトを取り上げた。

さらには、1983年に創設して以来アオバトの謎を次々と解明していった“こまたん”にもスポットを当て、その野鳥観察への尽きない情熱に迫った。





◀▲ 命がけで岩場に降り立つアオバト

Vol.40 『地球が食卓に並ぶまで』

地元の土を活用した自然／陶芸 体験記

● 矢島 そのみ（自然観察指導員）

2026.3



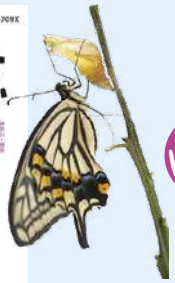
山に登って土を掘り、粘土として精製して器を作る。そんな自然体験もあっていい。丹沢の地で自然観察の指導をしつつ、地元の土を使った陶芸にも取り組む矢島そのみ氏の導きを得て、子どもたちと共に山で土を掘るところから陶芸体験をさせてもらった。身の回りのものすべては自然からできているのだということを五感で感じる体験記である。



◀▼ 山中での粘土の採取から、器づくりまで体験







Vol.41 『湘南のアゲハ幼虫』

湘南に分布するアゲハチョウ亜科10種の終齢幼虫を中心に収録

● 深澤 美佳（チョウ類研究家）

2026.7

日本のアゲハチョウ属の幼生期の研究では右に出るものがいないといってもいい平塚市在住のチョウ類研究家、深澤美佳氏に協力していただき、アゲハ類の幼虫にスポットを当てた。

湘南で見られるアゲハチョウ亜科10種の幼虫の見分け方をまとめ、食草の好みなど観察経験豊富な氏による独自の情報も込められた幼虫図鑑となっている。

また、氏に伺った幼虫の飼育法も紹介。編集部でもアゲハの幼虫を入手して実践し、一齢幼虫から羽化させるまでをレポートした。



▲ 幼虫を飼育しながら写真素材も撮影







その他のコーナーを振り返る

創刊から 10 年。今へ繋がるコーナーもあれば、立ち消えとなったコーナーもある。ここで、その試行錯誤の歴史を振り返ろう。



四季のコラム

四季折々、園に訪れる生きものと園児たちとの触れ合いなどが描かれる、編集部発のコラムである。創刊号より続く企画であるが、当初は生きものや自然に関する豆知識を編集部で独自にまとめて紹介する内容であった。途中、園児父兄からの要望に応えて、園での自然体験教育の様子を紹介するコーナーとなるなど紆余曲折を経たが、Vol.9 以降、編集部の堀田（園長）が園児家庭への配布物用に執筆している自然テーマの短文を、一般読者にも伝わるようにリライトして掲載するようになり今に至る。



湘南発！みんなでつくる 生きもの図鑑

特集と共に創刊号から湘南自然誌の中核をなす企画である（タイトルは変化している）。身近な生きものの発見を楽しむことが、このコーナーを通じて湘南地域の動植物の貴重な記録の蓄積に繋がるというのがコンセプトだ。Vol.9 からは生きもの写真がより見やすい形式を採用し、子どもでもわかりやすく、眺めるだけでも楽しくなる“季節の生きもの図鑑”として編集している。

発見記録は園内外から募集しているが、地域性を重視して Vol.14 からは神奈川県内のものに限定している。種の判別の難しいものは専門家に同定していただいた上で掲載し、その数は創刊号から今号までの累計で 966 種にものぼる。これらの蓄積データは、外部の研究者なども利用できるよう、種別検索が可能な索引を作成して平岡幼稚園の HP で公開している。主な活用例を挙げると、昆虫の専門家たちによって編纂される神奈川県下の大規模な記録集『神奈川県昆虫誌 2018』に、空白となっていた行政区の記録を提供した他、平塚市博物館による生物調査でも本コーナーの記録が使用された。また、幼児向け月刊誌の出版社から、笑顔で昆虫を持つ子どもたちの写真の転載依頼がある等、想定していなかった活用例もある。



平岡の自然教育の今

Vol.2 から「はっけん隊活動報告」のタイトルで始まった企画。平岡幼稚園の自然教育活動の様子を主に園児家庭向けに発信する内容であった。Vol.9 で「アクションレポート」と改称し、Vol.36 で現在のタイトルに落ち着く。タイトルの変更に伴って、内向きだった内容を外部の読者も楽しめるような記事へまとめていくようになった。

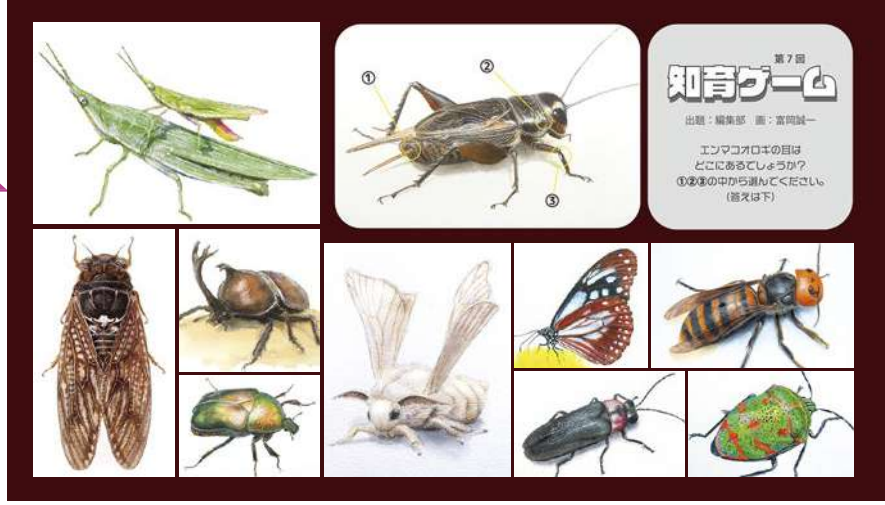
観察会や調査活動の報告などは、子どもたちの笑顔をふんだんに盛り込みながらその楽しさを読者に届けている。同時に湘南地域の自然体験スポットの紹介にもなるようなレポートコーナーとなっている。また、専門誌への投稿などの活動実績もここで報告している。

知育ゲーム



物事をよく観察する目と豊かな想像力を養えるようなコーナーを作りたいと考え、Vol.17 よりスタートした企画である。簡単なクイズや間違い探しなどを通じ、生きものの観察を遊び心あふれる楽しいものに育てていく、編集部発の学習コーナーだ。

ちなみに、当初はイラストを描いていたが、写真での出題の方が分かりやすいことも多く、現在は主に写真を使って問題を作成している。（※ Vol.21 、22、25 は休載）



教育コラム
心が育つ幼児教育



「幼児教育と自然体験」をテーマにした連載コラム。Vol.17 より、本誌の出版母体が「幼稚園」であることを活かした企画として、早稲田大学等で教鞭をとられてきた露木和男氏に寄稿をお願いして始まった（Vol.17 ～全 4 回）。長年理科教育の研究をされてきた氏らしく、人間の想像力を超えるような“ 自然 ”と出会うことが、生涯にわたる心の豊かさに繋がっていく、と説かれた。Vol.21 からは、『自然は友だち 春夏編』（神奈川新聞社）などの著作で知られる吉田文雄氏に執筆を引き継いでいただき、現在まで寄稿してくださっている。文章のみならず、氏撮影の美しい写真も見どころとなっているコラムだ。

※ 今号から、「幼児」や「教育」といったワードにあまりこだわらずに、吉田氏独特の世界観を活かしたいと考え、コラムタイトルに『自然と出会うよろこび』と加えてスタートする。今後も、身近な生きものとの出会いから小さな幸せを引き出していく、味わい深い吉田ワールドをぜひお楽しみいただきたい。



Vol.17 ～ 20　露木和男氏



Vol.21 ～ 吉田文雄氏（Vol.25 のみ休載）

湘南自然誌の明日

湘南自然誌は、読者に何が求められているか常に試行錯誤を続けている。









形になったことだけで満足していた創刊号。試行錯誤を重ねながら、年四回、十年出版を継続し、今では多数の公共施設に配架・収蔵していただけるものとなった。本園のような小規模法人の幼稚園がこのような雑誌を作るなど、全国的に見ても例がないであろう。

最初期の特集は、取材で伺った先生方のお話しを余すところなく盛り込もうとしていた。何の実績もなく手探りで始めたこの出版プロジェクトに快く協力して下さったことへの感謝の念が強かったからだ。しかし、どれだけ有用な情報を詰め込もうと、それがそのまま読者に伝わる訳ではない。まずは手に取ってもらわないと始まらないのだ。そこで、思い切って盛り込むテーマを絞り、字数を大幅に抑えて写真で魅せていく編集へと移り変わっていった。

こうした変化は特集以外にもおよび、新方針に合わせるため惜しくも終了させた企画も生じた。取り分け、子どもたちに生きものテーマの絵画を投稿してもらって紹介するコーナー「おえかきひろば」は捨てがたいものがあった。

先生方の豊かな知見と、教育機関としての発行趣旨、そして読者からの目線、それらの間のバランスはいまだ模索中である。デザイン面でも、今見返すと、「もっといいまとめ方ができるのに…」と感じる号が多々ある。まだまだ課題の残される湘南自然誌であるが、それだけ発展の余地があるのだと捉え、これからより広く、より多くの読者に求められる誌面作りに挑戦していきたい。

END